

トレンドを斬る!

次世代の食材として「昆虫食」が注目を浴びています。グロテスクな見た目に対する抵抗感は強いですが、タンパク質やミネ

ラルなど栄養価が高く、欧米では健康食品として認知されているとか。人口増加による世界の食糧難を解決する策のひとつとしても、食肉の家畜と比較すると環境負荷が低く、安定供給が可能な昆虫食に期待が高まっています。日本ではバッタの養殖やコオロギを使った調味料などの開発に多くの企業が参入し、食料源としての可能性を探っています。



365日が楽しくてたまらない! 「商売のヒント」

今月の商売のヒント:【地に足のついた商売】

江戸時代の城下町では草履(ぞうり)が普段履きでした。一方、遠路を旅するときは、普段の草履よりも丈夫な履き物を使っていたそうです。それは今でいう靴下と草履を合わせたようなもので、山道を歩くときはさらに虫除けがついたものを用意する旅人もいたようです。昔の旅がほとんど徒歩だったことを思えば、旅には旅用の履き物を用意したのでしょう。それが転じて「状況によって履き物(靴)を替えられる人」とは、つまり「臨機応変な対応ができる人」を指すようになったという説があります。「おしやれは足元から」とか「靴にこだわる人こそ本当のおしやれ」といった俗言もこの説に由来するものかもしれません。たしかに「足元」は、全体に占める分量が少ない割には人目を引く部分です。足元にはその人のセンスが凝縮されるのでしょうか。また禅宗には「脚下照顧(きゃっかしょうこ)」という言葉があります。その意味は「足元に気を付けよ」。自己反省、または日常生活の直視を促す語だそうです。「足元」は、実にさまざまな意味を含み持つ言葉です。「立っている足の下」という意味はもちろん、「縁の下や土台」「履き物」も足元といいます。さらには「身辺」「足取り」「弱



点」「足がかり」「足場」など今、置かれている状況も「足元」という言葉で比喩的に表現されます。「あの人は地に足がついた人だ」とか「人の足元を見る」などの言い回しがありますが、足元は無言のうちに「人となり」も物語っているようです。どんなに高価な靴を履いていても、その靴が泥やホコリで汚れていては、靴どころか本人の品格まで台無しです。逆に、多少くたびれた靴でも手入れが行き届いていれば、愛用品を大事にする心持が好感を呼ぶでしょう。足元には本質が見え隠れします。人の足元を見た商売はなかなかうまくいきません。日常を直視

して、変化をいとわず、状況によって履き物を替えながら足場を固めていく。明日、何が起こっても不思議ではない今の時代には、地に足のついた商売こそが王道ではないかと思えます。

トナリの

本棚



【ノースライト】

主人公の設計士が依頼者の希望どおり渾身の力を込めて設計した家。世間にも高く評価されたその家を訪れると、誰もおらず一脚の木の椅子だけが置かれていた。一家はどこへ消えたのか? 圧倒的な筆力で結末まで一気に読ませる一冊です。

船越税理士事務所

〒620-0054

京都府福知山市末広町1-1-1 中川ビル3階

TEL:0773-22-3708 FAX:0773-22-7343

<http://www.f-office301.com>

E-mail: info@f-office301.com

皆様のご感想をお待ちしております◎◎◎◎◎◎